
天龍のハヤテ

羽田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天竜のハヤテ

【コード】

N1285Q

【作者名】

羽田

【あらすじ】

フェアリーテイルの世界をハヤテのごとくキャラで書いてみました。

フェアリーテイル

フィオーレ王国、人口1700万の永世中立国、そこは魔法の世界。魔法は普通に売り買いされ、人々の生活に根付いていた、そしてその魔法を駆使して生業とする者達がいる、人々は彼らを魔導士と呼んだ。

魔導士達は様々なギルドに属し依頼に応じて仕事をする、そのギルド、国内に多数、そしてとある町にとある魔導士ギルドがある、かつて…いや後々に至るまで数々の伝説を生み出したギルドその名は

妖精の尻尾（FAIRY TAIL）

フィオーレ王国の東方にある街、マグノリアを黒髪の少年が歩いている。

『俺の名は橘ワタル、魔導士ギルドのフェアリーテイルに所属している魔導士だ』

「さてと、今日こそは仕事あるんだろうな」

ワタルはそう言いながらこの街にある魔導士ギルド、フェアリーテイルに入っていく。

「おはようございます、ワタル君」

ワタルがフェアリーテイルに入ると青い髪をした少年が出迎える。

『コイツは綾崎ハヤテ、見た目は十六歳程で貧相で貧乏臭いが、ウチのギルドに居る失われた魔法ロストマジックの一つの“滅竜魔法”を使う三人のドラゴンスレーヤー滅竜魔導士の一人で「天竜」のハヤテと呼ばれている、そして俺がこのギルドに入ったのはコイツとの出会いがあったからだ』

「よう、ハヤテなんか良さそうな仕事あったか？」

「そうですねー、モンスターの討伐の依頼なんつ！？」

バツ！！

ワタルと話していたハヤテが突如振り向く。

「綾崎ー！！」

ハヤテに同じ年程の少年が飛びかかる。

ドゴッ！

「おはようございます虎鉄さん」

ハヤテが飛びかかって来た少年の顔に拳を叩き込みながら言う。

「朝からツンデレだな綾崎」

拳を喰らった虎鉄はまるで堪えた様子がない。

「うるさいこの変態！」

ドカッ！

ハヤテが虎鉄を蹴り飛ばすが、虎鉄は平然と立ち上がる。

「無駄だぞ綾崎、その程度の攻撃この「鉄竜」の虎鉄には通用せん、大人しく俺と同性婚の認められているガルナ島で結婚しよう！！」

ブチッ

ハヤテの頭の辺り何かが切れる様な音がする。

「誰がお前なんかと結婚するかああああ！！ バーニア」

ハヤテが魔法を発動させる。

「いいだろう、力づくでもお前をガルナ島に連れていく 鉄竜棍」

虎鉄の腕が鉄の棒に変わる。

『突然ハヤテとバトルを始めた奴は虎鉄、ハヤテと同じ滅竜魔導士ファンタムロードで実力もハヤテと同程度で少し前まで幽鬼の支配者ってギルドに居た奴なんだけど、何故かハヤテに惚れていてしょっちゅうハヤテとバトルしている、周りの奴らもなれたもんでどっちが勝つか賭けをしたりしている』

ビュン

ゴツ ガツ ドガツ ガンツ ゴンツ ゴスツ ドゴツ バキツ

魔法によって加速したハヤテが虎鉄に連続で拳や蹴りを叩き込むが
そこまでのダメージは受けていないようだ。

「やるな綾崎」

ゴスツ！

「ぐあ
」

ハヤテは鉄と化した虎鉄の腕に吹き飛ばされる。

「流石に鉄竜の鱗は硬いですね、ではこれでどうです アームズ」

ドゴツ！！

「ぐふっ
」

魔法によって攻撃力の強化されたハヤテの一撃が虎鉄に入る。

「まだまだ、諦めんど綾崎！！」

「今日こそ息の根を止めてあげますよ虎鉄さん！！」

身体能力を魔法で強化したハヤテと鉄と化した体を武器に戦う虎鉄
の戦いが佳境に入る。

「式場の予約は済んでるぞ綾崎ー！！」

「キャンセルしろ変態!!」

二人が互いに勝負を決めようとぶつかり合おうとするが

ザシユ

「!?!」

ぶつかり合おうとした二人の間に剣が振り下ろされる。

「二人共止まりなさい」

「ヒナギク(さん)」

二人の間には剣を持ったピンク色の長い髪をした少女が居た。

「全く、二人共ギルドの中で暴れないでって何度言ったら分かるの?」

「スイマセン、ヒナギクさん頭に血が上っちゃって」

ハヤテは素直に謝るが虎鉄は不満そうにヒナギクに言う。

「桂、いくらお前でも私と綾崎の邪魔は許さ…」

チャキ

「何か言った?」

「ス、スマン、以後気を付ける」

ヒナギクに刀を突き付けられた虎鉄は冷や汗を流しながらヒナギクに謝る。

『ハヤテと虎鉄を止めたこの姉ちゃん、桂ヒナギク、このギルドに居る5人のS級魔導士の一人で「妖精女王（ティターニア）」と呼ばれていて、“サ・ナイト騎士”という武器のみの変更だけの普通の換装魔法とは違い鎧まで換装する魔法を使う実力者だ』

「お疲れ様ですヒナギクさん」

ヒナギクに茶髪の女せ…もとい少女が話しかける。

「マリアさん、見てたなら止めて下さいよ」

「元気があっていいじゃないですか、男の子にはこういうコミュニケーションも必要ですよ」

「…コミュニケーションじゃないんですけど」

「そうだ、アレは照れ屋な綾崎が私とガルナ島で結婚するのに必要な儀式なんだ」

「黙れ変態！」

虎鉄の言葉にハヤテはヒナギクに怒らればかりなので殴りかかりはしないが怒鳴る。

『マリアさんは普段はフェアリーテイルで看板娘？をしているがマリアさんのS級魔導士で「魔人」と呼ばれている、年は…ヒナギク

の一つ上の十七歳らしいが本当かどうかは……』

「ワタル君？私はピチピチの十七歳ですよ」

「分かってる、分かってるって、それよりほら、柏木が待ってるぜ」

マリアがワタルの方を向き、そう言うとワタルが焦って誤魔化すとマリアがギルドに有るカウンターに戻っていく。

「ワタル君、君は何て無謀な事を考えてるんだ」

「流石だなワタル君、私達は君を勇者と呼ぼう」

「にははー、マリアさんに年の話をしちゃ駄目だよワタル君」

「出やがったなお気楽三人組」

『こいつら三人は花菱美希、朝風理沙、瀬川泉、「剣帝衆」と呼ばれているヒナギクの姉ちゃんの親衛隊だ、普段はふざけたことばかりしている癖にS級の五人を除けばハヤテや虎鉄と同じくトップクラスの实力がある』

「あら貴女達、歩と仕事に言ったんじゃないの？」

「「「……………」」」

「ハムスターを一人残して帰って来たらしいぞ」

ヒナギクの問いに答えない三人の代わりに金髪のツインテールの少女が答える。

「「「「ナギ(さん)(ちゃん)(君)「「「「

「出やがったなナギ」

ヒナギクがナギの方を向き問いかける。

「それで本当なのナギ？」

「ああ、さつき自分達でそう言っていた」

ナギの言葉を聞いたヒナギクが三人の方を向く。

「話しを聞かせてもらえるかしら？」

「えーとヒナちゃんそれは…」

「何というか」

「さらばー!!」

ダダダダダ！！

三人が走って逃げだす。

「待ちなさいー!!」

ヒナギクが三人を追い掛けていく。

「いつもいつも騒がしい奴らだな」

ナギが呆れたように言っていると、ワタルがナギの前に立つ。

「ようナギ、ちょっと表出るよ、今日こそお前に勝ってやるぜ」

「ワタル君…」

ハヤテがワタルに心配そうに声をかけるがワタルは

「止めるなよハヤテ」

そうハヤテに言う。

「…分かりました」

「全く…お前はまだ懲りないのか」

「うるせーよ」

「まあいい、今日も軽くひねってやる」

そう言っつて二人が表に出る。

「行くぜ、アイスメイク 槍騎兵^{ランス}」

ワタルが造り出した無数の氷の槍がナギに襲いかかる。

「ふん、開け人馬宮の扉サジタリウス」

「で、あるからしてもしもし」

バキ バキ バキ バキ

ナギが呼びがした射手座の星霊サジタリウスが弓矢を放ち氷の槍を
全て撃ち砕く。

「ちっ」

『このチビの癖に偉そうなガキ、三千院ナギはフェアリーテイルの
マスターで「聖十大魔道」の一人の三千院帝の孫でその祖父から受
け継いだ膨大な魔力と強力な黄道十二門の鍵を九つ持つ星霊魔導士
だ……気に入らない奴だが俺はまだコイツに勝った事がない』

「アイスキャノン
氷雪砲」

巨大な大砲を造形し、強烈な砲撃を放つ。

ドン！！

「タウロス」

「MOOOO」

バキン！

牡牛座の星霊タウロスが手に持った斧で砲弾を砕く。

「ブリズン
アイスメイク 牢獄」

ワタルが氷の檻にタウロスを閉じ込める。

「へっ、邪魔な牛はこれで動けないぜ　アイスメイク　戦斧」

バトルアックス

ワタルが氷の斧で斬りかかる。

「戻れタウロス　開け獅子宮の扉」

ナギがタウロスを戻し、自身の最強の星霊の獅子宮の星霊を呼び出す。

ガッ！

呼び出された星霊が氷の斧を受け止める。

「またお嬢と戦つてのかよ、ワタル」

「うるせーなタマ、今日こそは俺が勝つ！それより毎回思うがてめえは獅子宮つまりライオンの星霊の癖に虎なんだよ！しかも白いし
！！」

「うるさい！タマが獅子だろうと虎だろうとお前には関係ないだろうー！！」

「いや、獅子宮なんですからやっぱりライオンじゃないといけないんじゃない……」

戦いを見ていたハヤテが呟く。

「行くぜ　獅子王の輝き（レグルスインパクト）」

タマが光を纏ったパンチを放つ。

「がふっ」

タマの拳にワタルが吹き飛ばされる。

「終わりだな、やっぱり無駄だったなお前じゃ私には勝てないんだよ」

「ちくしょう、まだまだ」

ワタルは立ちあがるが

「ワタル君、今日は止めておきましょう」

ハヤテがワタルを止める。

「何でだよ！俺はまだ戦えるぜ」

「今のワタル君ではまだナギさんには勝てませんよ、それは自分でも分かっているでしょ」

「ちっ、分かったよ、今日のところは俺の負けだ」

ワタルがナギに向かい悔しそうに言う。

「ふん、分かればいいんだ」

「でもお前とワタルの差はもうそんなに無いぜナギ」

ワタルに向かつて勝ち誇っていたナギに後ろからハヤテと同じ年頃に見える少年がそう言う。

「誰かと思えばお前か南野宗谷」

「見てたんですか宗谷君」

「本当か宗谷？」

『コイツは南野宗谷、ハヤテの友達で“波動”という魔法を無力化する魔法を使う対魔導士を専門としている奴だ』

「ナギ、いつまでも才能に胡坐かいてるだけならどんどん周りの奴に追いつかれるぞ」

「うるさい！私は努力とかそう言うのは嫌いなんだよ」

「そんな事言うからいつまでも強くなれないんじゃないかな」

ナギがそう言うともたもや後ろから声が聞こえて来る。

「西沢さんも居たんですか、そう言えばあの三人に置いていかれたと聞きましたが大丈夫でしたか？」

「うん、バルカンっていうモンスターの討伐に八コベ山に行っただけで、三人ともd寒いって言って帰っちゃって、私も帰ろうとしたら群れに囲まれちゃって、結局全部倒してから追いかけて来たんだけど」

「それは災難でしたね」

「ハムスターにやられるとは軟弱な奴らだ」

ナギがそう言うと少女は

「何を言ってるのかな、だいたいナギちゃんの方が私より弱いんだからそんな事言えないんじゃないかな」

「面白い、試してみるかハムスター？」

ナギが鍵を取り出す。

「何度やっても私が勝つんじゃないかな」

少女の体の一部が水に変わる。

『このナギと今にも喧嘩しそうな奴は西沢歩、ウォーター“水流”という水を操り自分の身体も水に変化させる魔法を使う、実力はハヤテ達には及ばないがナギや俺より強い。

こんな奴らが居るのが俺のギルド、フェアリーテイルだ。』

フェアリーテイル（後書き）

武装錬金クロスがあまり評判が良くないようなので新しいクロスを書いてみました。

予定としてはワタルとハヤテの出会い（原作第一話）と六魔将軍の話、バトル・オブ・フェアリーテイルの話を予定しています、もしよければ続きを書いた方がいいか今あげた三つは書かずに別の小説（銀魂クロスなど）を書いた方がいいか意見を下さると有難いです。

妖精の尻尾

港町ハルジオン、この町に一人の少年が降り立つ。

「やっと着いたか」

ハルジオンにたどり着いた少年、橘ワタルが呟く。

「「「「キヤーー!!」「」「」」

ハルジオンの町中に人だかりができています。

「何だありゃ？」

ダダダダダ

「有名な魔導士様が来てるんですって」

「「火竜（サラマンダ）」様よ」

ワタルが人だかりの方を見ていると後ろを走る二人の女性の声が聞こえた。

「「火竜」ってあの有名な!この町に居るのか」

同じ頃、「天竜」と呼ばれる魔導士の綾崎ハヤテがハルジオンの町を歩いていました。

「ここに火竜と呼ばれている人が居るのか……」

「火竜」様」

「素敵」

「私を焦がして」

「あそこか！」

「火竜」と聞いた少年がそちらに向かい走っていく。

ハヤテとワタルが人だかりに近づくとその中心には胡散臭そうな人の男が居た。

「H A H A H A」

「素敵」

「イヤン」

「カツコイイ」

「マジかよ、なんであんな胡散臭そうな奴がこんなにモテてるんだ？」

周りに居る女性たちが目にハートマークを浮かべ騒いで事が信じられないワタル。

(有名な魔導士だからか？いや、いくらなんでもこれは無いだろう)

ワタルが目の前の光景が信じられずに混乱していると、火竜の前にハヤテが現れる。

「……………えーと、貴方が火竜さんですか？」

火竜にそう尋ねるハヤテだが、どこか困った様な顔だ。

「そうデース、私が「火竜」デース」

「そうですか…じゃあさようなら」

ハヤテはそう言いながら去っていきこうとする。

「何なんデスカその反応は！！」

あまりにも無関心な態度に火竜が驚いていると

「ちよつとアンタ失礼じゃない！」

「「火竜」様は凄い魔導士なのよ！」

「そうよ、謝りなさい！」

「へ？」

ドカ バキ グシヤ ベキ

ハヤテは周りにいた女性達に囲まれ暴行を受ける。

「ぎゃー!!」

「まあまあ、その辺にしてあげて下サイ、彼だって悪気があったわけじゃないんデスカラ」

火竜がハヤテを襲っていた女性たちを窘める。

「キヤー!!」

するとすぐに女性達が止まり火竜の方を見る、その光景をワタルが真剣な目で見ていた。

キュウキュ

「ワタシのサインデス、友達に自慢するといいいデスヨ」

「いや、結構です!!」

火竜がサインをハヤテに渡そうとするが、嫌そうにハヤテは断る、すると……

シュー

数秒後、ハヤテはゴミ捨て場に倒れ伏していた。

「さて、ワタシはこの先の港に用があるのでこれで……」

「「「ええー!もう行っちゃうの!!」」」

火竜がそう言うと、女性達が残念そうに言う。

「レッドカーペット」

ボツ

火竜の足元に紫の炎が現れ、火竜はそれに乗る。

「夜は船でパーティーをやりマース、ぜひ来てくだサーイ」

そう言つて火竜は飛び立ってしまふ。

「…何なんでしょうあの人は」

ハヤテがそう呟くと

「ホント、いけすかない奴だな」

後ろに来ていたワタルが同意する。

ワタルとハヤテは一緒に昼食を取っていた。

「俺は橘ワタル、よろしくな」

「僕は綾崎ハヤテです」

「で、あの「火竜」って奴は“魅了”^{チャーム}って魔法を使ってやがった、その魔法は人々の心を故意に引きつけるモノなんだが、何年か前に発売が禁止された筈なんだ、そこまでしてモテたいなんてやらしい奴だよな」

ワタルの説明によると火竜は魔法で自分に好意を向けさせていたらしい。

「そうだったんですか」

「こつ見えても俺は魔導士なんだぜ…まだギルドには入ってないけどな、あつ、ギルドって知ってるか？」

「多少は」

「そうか、俺が入りたい所はかなり有名な魔導士がたくさん居るから入るのが厳しそうなんだけどな、でも絶対そこに入ってやる、そこなら大きな仕事がたくさんありそうだからな」

「そうなんですか、頑張つて下さいね」

「そういえばお前、「火竜」って奴の顔を見て残念そうにしてたけど、アレは何だったんだ？」

「ああ、それはつてああ！！」

ワタルの質問にハヤテが答えようとするが突然大声を上げる。

「ど、どうしたんだ？」

驚いたワタルがそう聞くとハヤテの顔が青くなっていき、突然立ち上がる。

「すみません、ちょっと忘れ物をしたのでここで！じゃあワタル君、機会があったらまた会いましょう」

そう言つてハヤテは自分の分の代金を置いて何処かに走り出す。

「…何なんだよ一体？」

取り残されたワタルが呟く。

「何だ？この剣帝衆つていうのはまたなんかやらかしたのか、デボン盗賊一家を壊滅するも民家七軒破壊　ねえ、やり過ぎだろコイツら」

ワタルはヒマつぶしに【週刊ソーサリー】という雑誌を読んでいた。

「こんなのが居るとはいえ、入るならフェアリーテイルがいいよな、でもどうやって入ったらいいか分からねえんだよな」

ワタルがそう呟くと

「アナタ、フェアリーテイルに入りたいんですか？」

「テメエは「火竜」！！」

後ろから火竜が現れた。

「いや、探しまシタ、実はちょっとお話があるんです」

「俺に何の用だよ？まさか男にまで“魅了”を使う気か？」

ワタルが警戒したように火竜にそう言う。

「いえいえ、そうではありません、それにしてもやはりあなたは“魅了”に気づいていたんデスネ」

「その通りだぜ、そんな狡い手でモテててご満悦なんて随分といい性格してるな」

ワタルが火竜にそう言うと火竜は

「あんなの只のセレモニーじゃないデスカ、ワタシはパーティーの間セレブな気分で居たいだけデース」

「有名な魔導士とは思えない小物振りだな」

ワタルが呆れたように言うと火竜は

「アナタ、フェアリーテイルに入りたいんデシヨウ？」

そうワタルに問いかける。

「…そうだが」

火竜は顎に手を当てながらワタルに言う。

「フェアリーテイルの「火竜」って聞いた事ありません？」

「…聞いた事あるな、お前！フェアリーテイルの魔導士だったのか
！！」

ワタルは「火竜」がフェアリーテイルの一員だと思いだし、想像と目の前の人物とのギャップに驚く。

「そうデース、入りたいならマスターに話をしなあげマース」

その言葉にワタルが反応する。

「本当にフェアリーテイルに入れるのか!!」

「もちろん、ただし“魅了”の事は黙っていて下さいネ」

火竜がそう言うとワタルは。

「嫌だ」

「え？」

「嫌だつて言つたんだよ、こつやつて面と向かつて話してみても前は信用できねえつて感じた」

「マスターへの紹介はいいんデスカ？」

火竜がワタルにそう聞くが、ワタルは

「お前みたいな小物臭くて信用できない奴の力を借りなくても地力で入つて見せるぜ、じゃあな」

そう言つてワタルが立ち去ろうとする。

「そうデスカ、仕方無いデスネ」

火竜がそう呟いて何か合図する。

「!?!」

ガン!! ドサッ

「テメ…エ…」

突如、物陰から現れた男に殴られ気絶するワタル。

「船に運んでおきなサーイ」

「はい」

火竜はそう言うと、また紫の炎で何処かに飛んで行き、男がワタルを担いで火竜の船に向かう。

「う…うん」

ワタルが目を覚ます。

チャラ

「何だコレ？」

目を覚ましたワタルの両手には手錠がつけられていた。

「目が覚めましたか？」

ワタルの前で火竜が酒を飲んでた。

「テメエは「火竜」、何のつもりだ!!」

ワタルが火竜を睨む。

「そう睨まないで下サーイ、まあ何もできないでしょうケド、H A H A H A」

火竜がそう言いながら笑う。

「なんだと!!」

ゾロゾロ

すると、ワタルと火竜の居る部屋に意識を失った女性を抱えた男達が入ってくる。

「“魅了”を使ってパーティーに呼んだ姉ちゃん達だな、その人達をどうする気なんだ?」

ワタルがそう聞くと火竜は

「ちょっとビスコに行って働いてもらっただけデース」

「そんなことさせるかよ! アイスメイク槍騎兵^{ランス}って何!??」

ワタルが魔法を使おうとするが魔法が発動しない。

「H A H A H A、その手錠をしている間は魔法を使うことができません」

ハヤテが急に真面目な顔になって火竜に聞く。

「貴方、フェアリーテイルの魔導士で「火竜」と呼ばれているんですよね？」

「そうデース、このワタシこそフェアリーテイル最強の魔導士の一人とウワサされる「火竜」デース」

火竜が答える。

「おかしいですね、僕もフェアリーテイルの魔導士なんですけど貴方に見覚えがありません、もちろん本物の「火竜」と呼ばれている人を知っていますが貴方とは似ても似つきません！」

そう言つてハヤテは上着を脱ぎ、袖の無い服の姿になる。

「なっ！」

「ハヤテがフェアリーテイルの魔導士だと！」

ハヤテがそう言つと火竜とワタルが驚く。

「あ、あの紋章…本物だぜギルバートさん」

「その名を呼んではいけません」

ハヤテの右肩に有るフェアリーテイルの紋章を見つけた部下が火竜もといギルバートに言う。

ビュ

ギルバートの出した炎が消える。

「な、な、何デスッテー!!!」

「俺はコイツ見た事あるぞ、青い髪に一見貧相で貧乏くさい顔、間違いない!コイツはフェアリーテイルの「天竜」の滅竜魔導士、綾崎ハヤテだ!!!」

「ハヤテがフェアリーテイルの「天竜」だと」

ギルバートの部下の言葉にワタルやギルバート達が驚く。

「覚悟して下さい、フェアリーテイルの名を語って犯罪を犯した事を後悔させてあげますよ」

ハヤテがギルバートに歩み寄っていく。

「こ、来ないで下サーイ レッドシャワー」

ギルバートが無数の小さな炎の玉を放つ。

「バーニア」

それを魔法で加速したハヤテが全てかわし、ギルバートの懐に入る。

「アームズ」

ドゴオオ!!!

ハヤテの拳によりギルバートが船の床に叩きつけられる。

「ギルバートさん!!」

「よくもギルバートさんを！」

「やっちまえー！」

ギルバートの部下達がハヤテに襲いかかる。

ドカ バキ ゲシ ガシ グシヤ

「ふうー、大丈夫ですかワタル君？」

ギルバートの部下たちを倒したハヤテが寝ている女性達の介抱をし、ワタルの手錠を外しながら言う。

「ありがとよ、それにしてもお前も魔導士だったんだな、それもフェアリーテイルの」

「内緒にしようとしたんじゃないですけど、話すタイミングが無くて」

こうしてハヤテとワタルはギルバート達を縛り上げ、船を港につけて駆け付けた軍隊に引き渡した。

「僕達のギルドに入りたいんですね？」

「ああ、そうだけど」

「じゃあ一緒に行きましょうよ、僕達のギルドに」

「おう！」

こうしてハヤテとワタルはフェアリーテイルに向かい走っていく。

おまけ

突然ワタルと別れたハヤテ、何をしていたかというところ……

「あつ、有ったー、良かったー、これを失くしてたらナギさんに怒られる所だったー」

ハヤテはゴミ捨て場に戻ってきており、手には金色の鍵を持っていました。

「天蝸宮のスコープピオンの鍵、落としたと気付いた時は焦ったなー」

ハヤテは途中で偶々手に入れた黄道十二門の鍵の一つをボコボコにされた時に落として居たのだ。

「さてと、あの野々原さんの偽物の方、何か気になるな……」

こうしてハヤテは夜まで待ってみる事にした。

妖精の尻尾（後書き）

滅竜魔法（天竜）

少なくともこの小説では自分に“アームズ”などの補助魔法や治癒魔法を使える設定にしています。

何故なら流石にそうじゃないとハヤテの攻撃法が己の肉体と息吹^{ブレス}だけになるからです。

今回さらつと名前が出てきましたが野々原は5人のS級魔導士の一人で、「火竜」の滅竜魔導士です。

現在出てきたキャラのフェアリーテイル内の实力は（マスターを除く）

野々原>ヒナギク、マリア>>ハヤテ、虎鉄>泉、理沙、美希、宗谷>歩>ナギ>ワタル

ちなみにハヤテと虎鉄は

ハヤテの方が実力的には少し上だが本気で戦ったら虎鉄が勝ちます、なぜならハヤテは魔法的に攻撃力があまり高くない相性が悪いからです。

後のフェアリーテイルのキャラはS級以外は出番のあまり無いキャラばかりだと思えます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1285q/>

天竜のハヤテ

2011年10月8日00時25分発行